戯曲
ディオニュソス
—世界の墓—
II
正道
SEIDOU

目次

ディオニュソス　世界の墓　II

全体の目次 …… 3

第4章　オルフェウスの死

登場人物 …… 5
女たちの復讐 …… 5
瞑想からさめたオルフェウス …… 8
オルフェウスと女たちの対面 …… 10
八つ裂きにされるオルフェウス …… 12
翌朝、静かになった「出家者の村」 …… 15

第5章　首とディオニュソス

登場人物 …… 19
首とディオニュソスの邂逅 …… 19
アポロンとオルフェウス …… 25
アポロンとディオニュソス …… 28

第6章　竪琴とアポロン

登場人物 …… 32
デルフィのアポロン神殿 …… 32
ヘルメスの登場 …… 34

第7章　ピュトンとピュティア

登場人物……39
デルフィが遠景として見える土地……39
地下道の中……44
ピュトンとアポロンの物語……47
ディオニュソスと蛇……50

ディオニュソス　世界の墓　II

全体の目次

前巻までのあらすじ
第1章 トラキアのオルフェウス
第2章 太陽と月の詩
第3章 見捨てられた女たち
第4章 オルフェウスの死
第5章 首とディオニュソス
第6章 竪琴とアポロン
第7章 ピュトンとピュティア
第8章 存在と虚無
第9章 大神アテナ
第10章 暁の子
第11章 オンパロス
エピローグ

第４章　オルフェウスの死

登場人物

アンピメドーン　ゲテ村出身のオルフェウス教徒。ゼリアの夫。

イタコス　ゲテ村出身のオルフェウス教徒。アンピメドーンの友人。

タリア　小さなディオニュソス宗団のリーダー。

ネアイラ　タリアに仕える、参謀、あるいは副リーダー的な立場のディオニュソス教徒。

ラディオケー　元オルフェウス教徒。捨てられた妻たちの間では、リーダー的な役割を担っている。

ゼリア　元オルフェウス教徒。以前からディオニュソス教徒の情人を持っていた。

ポリュメネー　元オルフェウス教徒。

クロリス　ゲテ村の長老の孫。元オルフェウス教徒。

トアース　オルフェウス教の幹部信者で、ナンバーワンの地位にある。

ペリパース　オルフェウス教の幹部信者で、ナンバーツーの地位にある。

オルフェウス　オルフェウス教の教祖。主神アポロンに忠実である。

女たちの復讐

出家者の村。半月が登っている真夜中。男たちは雑魚寝で就眠していた。そんな男たちの耳に、突如として爆音が聞こえてくる。それは勢いよく楽器をうち叩く音だった。楽器はアウロス、ティンパノン、クロタラ（笛、太鼓、カスタネット）である。

アンピメドーン（飛び起きて）何事だ！

イタコス　音が近い！　かなり近いぞアンピメドーン！

タリア　近いどころの話じゃない、目の前にいるんだ。（ゼリアに）やれ、ゼリア！

ゼリア　捨てられた女の恨みよ、えい！

〔ゼリアが、アンピメドーン（夫）の額を、持っていた石で殴りつける〕

アンピメドーン　グアッ！　何をする！

ネアイラ　仕上げは私がやりましょう。

〔ネアイラが斧を振り下して、アンピメドーンの首をへし折る〕

イタコス　アンピメドーン！（ネアイラに）お前たちは何者だ！

ネアイラ　我らはディオニュソス神の使徒なり。そなたらオルフェウス教徒に、つねづね邪教徒の誹りを受けていた者らだ。我らは、まさにこのような機会を待っていた。

イタコス　ディオニュソス教の人間だと？　だが、アンピメドーンを石で殴ったのは、奴の女房ではなかったか。

ゼリア　ええ、そう。私はゼリアよ。

イタコス　それが、どうして自分の夫を、しかもディオニュソス教徒と一緒になって殴り殺すのだ。

ゼリア　捨てられたからだよ！　あたしたちは男に捨てられて、教祖に捨てられて、ついに自分の居場所を失ったんだ。そんなあたしたちを受け容れてくれたのは、このディオニュソス教の人たちだけだった。

イタコス　だがそいつらは、ずっと我々と犬猿の仲だった、ディオニュソス教徒だぞ。

ポリュメネー　でもね、私たちは分かり合ったの。一緒にお酒を飲んで、一緒に踊りを踊って、一緒に歌を歌って。

ゼリア　ええそう。あたしたちの心は一つに融けあったの。お酒は、心の壁を壊してくれるのよ。

イタコス　その酒とやらのせいか。お前たちが正気を失っているのは。

タリア　そうさ。ディオニュソスさまは狂気の神さま。酒は狂態を生みだす薬。そして狂気は、人知を超えた力の源なのだ。

〔遠くから多数の悲鳴が聞こえる〕

イタコス　おお、仲間たちの声が聞こえる。断末魔の叫びが……

ネアイラ　今頃ゲテ村の男たちは、あんたらの妻や、私たちディオニュソス教徒の手で、どんどん殺されているはずだわ。

イタコス　女だてらに、なんということを。

タリア　男だっているさ。ディオニュソス教徒の男たちは、この村の周囲を隙間なく囲ってる。中から逃げ出てきたオルフェウス教徒を、残らず殺してしまうためにね。

ネアイラ　だから、村の中には女だけがいるの。暗がりの中では、男同士だと、どちらが味方か、敵か分からないでしょう。その点この「女はみな味方、男はすべて敵」という、この図式は単純で分かりやすいのよ。

ゼリア　半月の月明かりでも、女と男の区別ぐらいはつきますからね。

クロリス　でも、それは本質的な話ではありません。これは女の闘いなんです！　捨てられた女の恨みを晴らすための闘いなんです。だから、この場にいるのは、私たち女だけでいいんです。

ラディオケー　そうだ。女が男を叩き伏せるんだ。

イタコス　叩き伏せるどころではないじゃないか。ディオニュソス教徒の女は、我々の命まで奪っているじゃないか。

タリア　あたしたちは、あんたらに何の同情も持ち合わせてないからね。乙に澄ましてあたしたちを睥睨してた奴らを、ただ殺してやりたいのさ。もっとも、あたしは誰よりも「邪教祖オルフェウス」を殺してやりたいと思っているが。

イタコス　誰を名指して邪教祖などと呼んでいるのだ！

タリア　今さらイキるなよ。あんたを生かしてるのは、オルフェウスの居場所を聞きたいからさ。ほら答えなよ、お前たちの教祖さまはどこにいるんだい？

瞑想からさめたオルフェウス

出家者の村の村外れに設えられた、アポロン神殿の分社。丘陵の頂上にあたる。オルフェウスはここで寝泊りしているのだが、現状は瞑想をしている真っ最中である。教団幹部の二人が、門番のように分社の外を守っており、村のほうから聞こえてくる騒音に驚いている。

トアース　この騒ぎは只事じゃない。ここにはいないはずの女たちの奇声が聞こえ、男たちの叫喚が聞こえる。村のほうでは、きっと嗜虐の地獄が現出しているのだろう。

ヘリパース　おそらく女たちが襲撃しに来たのだ。自分たちを見捨てて出て行った男たちに、復讐をしに来たのだ。

トアース　む……たしかに怨恨はあるだろう……だが、いきなり、このように激烈な復讐に至るものなのだろうか。あの大人しかった女たちが、とても信じられん。

ヘリパース　私も直接行って事情を確かめたいのだが、しかし我らは、ここでオルフェウスさまの安全を守らなければならない。

トアース　しかもオルフェウスさまは瞑想の真っ最中ときている。つまり、あの方の魂はここにないということだ。

ヘリパース　うーむ、きっと今頃オルフェウスさまの魂は、遠くデルフィのアポロン神殿に留まっていることだろう。こちらで下手に肉体に刺激を与えたら、間違いなく、オルフェウスさまの魂が傷つくことになる。

トアース　通常どおりならば、自然に帰ってこられるまで、あと半刻ほどだろう。それまでの間、我々だけでオルフェウスさまの肉体を守れるだろうか。

ヘリパース　それが出来ればいいが……やや、見てみろ、こっちに誰か来るぞ。男だ。

〔ボロボロになったイタコスが、フラつきながら近づいてくる〕

イタコス　大変です。出家者の村が襲われています。

ヘリパース　ああ……

イタコス　もう助けるには手遅れの状態ですので、お二人とオルフェウスさまは、どうかここから逃げてください。ここも、もう危ない。

トアース　やはりそうなのか。女たちが来たんだな。

イタコス　ゲテ村の女たちだけじゃないんです。ディオニュソス教徒が、女たちの仲間になって、私たちを襲っています。

トアース　ディオニュソス教徒！　それでこんな騒ぎになっているのか。

ヘリパース　とすれば、オルフェウスさまが、いよいよもって危ない。ゲテ村の女たちにとっては元教祖でも、ディオニュソス教徒にとっては単なる仇敵だ。振り上げられた奴らの腕は、何のためらいもなく振り下されるだろう。

イタコス　きっとそうなりましょう。ですから、オルフェウスさまには、急いで逃げてもらうしかありません。

トアース　では行こう。こうなれば瞑想中でも何でも仕方ない。

〔分社の扉を開け、中に入っていく三人。オルフェウスは今なお瞑想中である〕

ヘリパース　オルフェウスさま、オルフェウスさま、どうか戻ってきてください。

〔オルフェウスに反応がないため、ヘリパースが肩を揺り動かす〕

ヘリパース　お願いですから、オルフェウスさまの魂よ、アポロン神殿から帰ってきてください。命の危険が迫ってるんです。早く目を開けて、私たちの声を聞いてください。

〔それでもオルフェウスの目は開かない〕

トアース（ヘリパースに）もう二人で担いでいこう。

ヘリパース　いや、ちょっと待て。オルフェウスさまに、表情が戻りつつある。

オルフェウス　うう……ん。

ヘリパース　オルフェウスさま！

オルフェウス　いったい何事だというのだ……瞑想中なんだぞ。

トアース　お怒りは覚悟の上です。でも今すぐ逃げなくてはなりません。このままではオルフェウスさまの命が奪われかねません。

オルフェウス　どういうことだ。

ヘリパース　出家者たちの妻や娘たちが襲撃してきたんです。おまけにディオニュソス教徒までが、それに加わって！

イタコス　はやく逃げてください！　もう時間がありません。

オルフェウスと女たちの対面

オルフェウスの意識が次第にはっきりとし始める。当然彼は、この珍事に対する驚きを隠せない様子である。

オルフェウス　馬鹿な……私は今までアポロンさまと交感していたのだぞ。アポロンさまは予言の神なのだぞ。そのアポロンさまが、何も言っていなかったのだぞ。

ヘリパース　私どもには、そんな事情は分かりません。とにかく今は、急いで逃げなければ危険なのです。

イタコス　賊たちは、きっと、もう近くまで来ているはずです。

〔そう言うイタコスの背後から、タリアの声が聞こえる〕

タリア　そのとおりだ。あたしたちは、もうここにいるんだ。

トアース　なんだと！

〔オルフェウスたちが振り向くと、分社の外に、タリアを先頭にした、総勢十人ほどの女が立っている。その中には、もちろんゲテ村の女たちも混ざっている〕

ヘリパース　きさまたち、どうしてここに？

タリア　当たり前じゃないか。この場所を突き止めるために、その男（イタコス）を逃がしたんだからね。あたしたちは、もうずっと前からお前たちの様子を見てたんだ。

ネアイラ　夜の闇のなかですから、あなたたちの目から隠れることなどは簡単でしたよ。

タリア　それに、教祖さまを必死で揺り動かしてるお前らは、わたしたちの気配なんか、全然感じちゃいなかったしね。

トアース　くっ……

〔ネアイラが、オルフェウスの傍に近づく〕

ネアイラ　この竪琴は取り上げさせて頂きますね。何か穏やかな詩でも吟じられたら、私たちは、身動きひとつ出来なくなってしまうそうですから。

クロリス　ええ、そうです。それほど強力な武器もありません。

オルフェウス　お前たちは何をしようというのだ？

ヘリパース　この野蛮な女たちは、我々をなぶり殺しにするつもりなんです。

ゼリア　野蛮だなんて……オルフェウスさま、こちらを見ないでください。

オルフェウス　私の信徒たち、今ならばまだ引き返せるぞ。

タリア　いいや野蛮で結構だ！　オルフェウス、もう手遅れなんだよ。事ここまで至れば、引き返すことなんか出来やしない。

〔背後の女たちを睨みながらタリアが続ける〕

タリア　お前らゲテ村の女どもは、もとの教祖さまを拝顔して、気萎えしちまうんだろうがな。でもね、お前らが手を引き戻しても、それと同時に、ディオニュソス教徒である私たちが、手を伸ばすことになる。あたしたちは、オルフェウスを殺すことに躊躇なんかしない。だから手遅れなんだよ。

ラディオケー　でもタリアさま、オルフェウスさまだけは助けられないかしら。

タリア　邪魔をするなら、まずお前から殺す。

ネアイラ（ゲテ村の女たちに）静かにしていてくださいね。この状況は、ディオニュソス教徒にとって、千載一遇の好機なんです。

タリア　オルフェウスよ、男どもよ、お前たちは、もうとっくに死に際に立ってるんだよ。

トアース　ふざけるな、我々がオルフェウスを死なせはしない。

イタコス　私も、この命に代えてお守りします。

タリア　フフフ、勝手にするがいい。あたしたちも勝手にするから。

八つ裂きにされるオルフェウス

オルフェウスが、自分を庇っていた男たちの前面に出てくる。そうしている間にも、女たちの人数が増えていく。

オルフェウス　もうよい。もうこの命は諦める。だから女たちよ、私の命と、この生き残った三人の命

を、引き換えにしてはもらえないだろうか。

タリア　出来ない相談だ。あたしらは、誰も助ける気はないよ。だからオルフェウスとオルフェウス教徒たちよ、あたしたちの手で虚無にお帰り！

ネアイラ　ではタリアさま、あれですね。

タリア　そうだ八つ裂きだ。まずはオルフェウスをやるぞ。

ヘリパース　八つ裂きだって！

ネアイラ　後続の者もだいぶ集まりましたね。では仲間たちよ、裏切り者の処刑のやり方でいきますよ。いつものように隊形を整えてください。

タリア　信徒の男三人は、ひとまず取り押さえておけ。

ネアイラ（クロリスに竪琴を差し出し）これは、あなたにあげるわ。

〔ディオニュソス教徒たちが、オルフェウスの四肢を一斉に掴む。首を掴んでいるのはタリアである。ネアイラは、オルフェウスには触れずに、少し離れたところから、音頭を取る係を担う〕

オルフェウス　何をするつもりか！

タリア　話は聞いてただろう。そら始めなネアイラ。

ネアイラ　では始めましょう。ディオニュソスさま、あなたさまに「八つ裂き」を奉納いたします。どうかご嘉納くださいませ。では「えーい」。

〔えーい、の声に合わせて、四肢を持つ者たちが、いったんオルフェウスの関節を緩く曲げる〕

ネアイラ「おっ！」

〔おっ、のかけ声で、四肢を持つ者たちが、今度は思い切りその四肢を引っ張る〕

オルフェウス　ギャーッ！　やめてくれ！　私をディオニュソス神の名のもとに殺すなど、あの方は絶対に喜ばないぞ！

タリア　なんの世迷い言を！　ディオニュソス教とオルフェウス教に、何の関りがあるものか！
いけネライア、続きだ。

ネアイラ　かしこまりました。えーい、おっ！

トアース（女たちに抑えられながら）オルフェウスさま！

ネアイラ　えーい、おっ！

イタコス（女たちに抑えられながら）ああ関節がぶらりと……もう完全に脱臼してるんだ。

ネアイラ　えーい、おっ！

オルフェウス　ああ！

ポリュメネー（ディオニュソス教徒の背後で）おお、オルフェウスさまに捨てられた私たちでさえ、見
てるのがつらい。

クロリス（ディオニュソス教徒の背後で）まさか、こんなオルフェウスさまを見ることになるなんて。
あの白く美しかった皮膚が裂け始めてる。

ネアイラ　えーい、おっ！

タリア　もう少しだ。コイツ喉がつぶれて、もう声が出せなくなってる。

ネアイラ　えーい、おっ！

タリア　そろそろ人数を増やすよ。一気に引っこ抜くんだ。

〔各手足に二人ずつだった要員が、三人ずつに増員される〕

ネアイラ　では、えーい、おっ！

〔四肢が抜けて、オルフェウスの八つ裂きが完遂される。オルフェウスも死ぬ〕

タリア　よしきた！　よくやったぞ、お前たち。

ネアイラ　あとは、胴体と首を切り離すばかりです。

ゼリア　もういいのではないですか？

ネアイラ　よくなんかありません。そこまでしなければ、本当の八つ裂きとは言えないのです。私たちは、本当の八つ裂きをディオニュソスさまに奉納したいのです。

ラディオケー　もう勝手にしてください……けれど、こちらの三人は助けてやってもらえないでしょうか。もう復讐は充分です。

タリア　なら、その男たちを連れて、お前たちはもう帰れ。

ネアイラ　あとの始末は、私たちディオニュソス教徒が行いましょう。

ラディオケー　分かりました。行きましょう、みんな。

翌朝、静かになった「出家者の村」

夜が明け、すでにディオニュソス教徒たちは立ち去っている。そこにゲテ村の、元オルフェウス教徒の女たちが集まってくる。クロリスは、オルフェウスの竪琴を持っている。

ラディオケー　あのあと、どうやらディオニュソス教徒たちは、オルフェウスさまの死体を肴にして、酒宴を張ったみたいだね。そこいら中に、ブドウ酒を飲み散らかした跡がある。

ゼリア　オルフェウスさまの遺体で小山が作られています。あの引きちぎられた遺体で……きっと、これを中心にして踊り狂ったんですわ。円く踏みしめられた足跡がありますもの。

ポリュメネー　遺体の小山の頂上には、オルフェウスさまの首級（みしるし）か……でも思ったよりも穏やかな顔をしてらっしゃる。

ラディオケー　たしかに不思議と、苦悶に満ちている顔ではないわね。

クロリス（オルフェウスの生首を前にしながら）私たちが望んだのは、結局こういうことだったのでしょうか。

ゼリア　望むと望まないとに関わらず、こんな風になるしかなかった、私にはそんな気がします。

ポリュメネー　ところでゼリア、あなたはこれから、真正のディオニュソス教徒になるの？　それとも私たちはみんな、もうディオニュソス教徒になってるのかしら？

ゼリア　そうじゃないと思う。オルフェウスさまが亡くなって私……不思議と、ディオニュソス教徒たちから、前よりも心が離れていく自分を感じるの。

ポリュメネー　ああ、私もそうかもしれない。さすがにあれではね。

クロリス　そうですよ。ディオニュソス教団は恐ろしすぎます。それに、オルフェウスさまがいなくても、オルフェウスさまの「教え」を奉じることは出来ると思うんです。ですから私は、今後もオルフェウス教徒でありたいと思います。

ポリュメネー　うん、私もそう思う。でも出家の教えだけは忘れてしまいたいかな。

ラディオケー　そうだね……うん、今回の悲劇を生んだ「出家の教え」は封印してしまおう。その上で、以前の教えを中心にしてさ、もういちど私たちで、やりなおそうじゃないか。

ポリュメネー　それなら、トアースさまや、ペリパースさまも協力してくれるかもしれない。

ゼリア（オルフェウスの生首に向かって）どうでしょう、私たちの考えを許してくださいますか、オルフェウスさま？

ポリュメネー　答えてくださりそう？

〔無論オルフェウスは何も答えない。そこでクロリスが、オルフェウスの声の代わりとばかりに、彼の竪琴をポロンと鳴らす。すると一瞬の静寂のあと、いきなり竪琴が勝手に大きな音を立て、続けざまオルフェウスの生首が目を開ける〕

クロリス　オルフェウスさま！

ラディオケー　お、お許しください。お許しください！

ゼリア　私たちが仕出かしたことを怒らないでください！

〔竪琴と生首が動きだし、宙に浮かび上がる〕

オルフェウス（竪琴の音を伴って）
悔やむな、わが娘たちよ。
私は死んで初めて知ったのだ、
今回の出来事の本当の意義を！
かかる「本当の意義」こそが、
アポロン神の予言をすら、
無力化せしめた原因だった。
すなわち、より高位にある、
「神の計画」がこの世に現れる時には、
いかなアポロン神の予言とて、
その口を塞がれるしかないのだ。
つまりは、そういうことだった。

だから歎き悲しむ女たちよ、
お前たちに罪はないことを知れ。
私は、いまや無心である。
ただ、竪琴の「真の持ち主」が図りし、
深謀なる計画――これを私は、
一度なりとも竪琴を預かった者として、
たとえ、かような生首になろうとも、
これより全力をもって成就することを、
ここで皆に宣誓することにしよう。
とはいえ、汚れた私の体ばかりは、
どうかヘブロスの川面へと、
余さず流してしまってほしい。

クロリス　わ、わかりましたオルフェウスさま。仰せのままにいたします。

〔オルフェウスの首が少し頷いたかと思うと、その首と竪琴が、光を放ちながら、どこかに飛んでいってしまう。ただし、首と竪琴は、まったくの反対を目指してゆく〕

第5章　首とディオニュソス

登場人物

シレノス　ディオニュソスの従者。馬の耳と尾、足を持った半獣神。

モルティ　ディオニュソス教の中心的信女。ややボーイッシュな性格で、シレノスと仲がいい。

ディオニュソス　ぶどう酒の神、虚無の神。オルフェウスと一緒に冥界に降ったことがある。

アケテス　ディオニュソス教の中心的信者。船を操る技術を持っている。

オルフェウス　今や首だけの姿となった詩人。

首とディオニュソスの邂逅

オルフェウスの生首は、一路ナクソス島へと飛んでゆく。そこにディオニュソスが滞在していたからである。つまりオルフェウスの生首は、ディオニュソスを目指して飛んでいったのだった。ナクソス島では、多くの信徒を伴ったディオニュソスが寝泊りしていた。

そうしたなか、ディオニュソスは眠らないまでも、その体を木陰で休ませていた。

シレノス　ディオニュソスさま、あれを見てごらんなさい。昼間だというのに星が見えまする。木々の向こうのほうで光っておりますよ。

モルティ　本当に星でしょうか？　こちらに向かって動いているように見えますが。

シレノス　星が動いてたまるか。

モルティ　だから星じゃないって言ってるんでしょ。星が昼間に光ってたまるか。

ディオニュソス　ああ。確かにあれは星ではない。でも何だろう。もうすぐ来るぞ。

アケテス　気をつけてください。

〔アケテスがディオニュソスを庇うような動作をする。光る物体が差し迫る〕

シレノス（腕で顔を隠して）うわ、当たるぞ！

アケテス　いや、大丈夫だシレノスどの。私たちの前で止まってくれた。

シレノス（閉じた目を見開いて）なななな、なんじゃこりゃ！

モルティ　首だわ！　光ってるけど、誰かの生首に違いない。

アケテス　神々のいたずらでしょうか。それとも妖異のものでしょうか。

ディオニュソス（生首を見てシレノスたちに）お前たちは会ったことがない人間だ。（生首に）おお……オルフェウス、お前は何という姿で私に会いに来たのだ？　冥府で別れたとき以来、いったいお前に何があったというのだ？

オルフェウス
　ハデスの前に引き出されたとき、
　私は、妻を連れ帰るための、
　ある「条件」を言い渡されました。

シレノス　なんじゃ、急に生首が歌いだしたぞ。

ディオニュソス　黙っておれシレノス。オルフェウスよ、何でもいいから言ってくれ。

オルフェウス
　その条件とは何か？　それは、
　冥府から地上までの道のりにあって、
　私の後ろを付いてくる妻、
　すなわちエウリュディケに向かって、
　決して、私が振り返ってならず、
　その姿を一瞥してもならないということ。

冥王の言葉をそのまま伝えるならば、

「お前の妻には、道中一切、
その声を発することを禁じおく。
よってオルフェウスよ、お前は、
自身の妻の存在を、その目と耳では、
いっさい感受することが出来なくなる。
そういう事であるからお前は、
耳目の代わりに、自慢の『心』ででも、
愛する妻の臨在を感じたらよかろう。
うむ、せっかくだから私たち夫婦に、
理想の夫婦愛でも見せつけてくれ。
そうだ、この試練のなかでお前の、
『妻を信じる力』を見せてほしいのだ。
ゆえにオルフェウスよ、お前は、
決して後ろを振り返ってはならない。
決して妻を見てはならない。
そして、万が一にもこれを見たならば、
私はエウリュディケをして、
永遠に冥府の囚われ人とするだろう」

そのようにハデスは言いました。

ディオニュソス　それで実際には、お前たち二人はどうなったのだ？

オルフェウス
ディオニュソスさま、私たち夫婦は、
私とあなたとが歩いた往き道を、
生者の国へと還るための道として、
もう一度通った訳ではございません。
そのとき私たちが通ったのは、
それとは全く別の、もっとずっと、
不気味な見た目の地下道だったのです。
その隘路には、死者の骨が敷き詰められ、
私たちが足で踏みしめる度ごとに、
割れた骨がパリンと音を立てるような、

不吉このうえない悪路でありました。

ディオニュソス　そうだったのか、なるほど。

オルフェウス
しかし、このオルフェウスにとっては、
その悪路は反面、とてもありがたい、
この心の助けになるものでもありました。
というのも、その骨が割れる音によって、
エウリュディケの存在を「標」として、
逐次そこに認めることが出来たからです。

ディオニュソス　ああ、そうだな。骨が折れる音がするのは「それを踏んだ者がいる」という事だからな。

オルフェウス
ところがです。地上に近づくにつれて、
それまで足元を埋め尽くしていた骨たちが、
次第に少なくなり、僅かとなり、ついには、
足元から完全に消えうせてしまいました。
代わりに見えるようになったのは、
さほど固くもなさそうな赤土だけでした。
隘路は、確かに不気味ではなくなりました。
骨が発する、嫌な臭いもなくなりました。
ああけれど、けれどけれど、
それは私たち夫婦にとってみれば、
なんと呪わしき変化だったことでしょう。

ディオニュソス　それはどうして？

オルフェウス
分かりませんか？　だってそうでしょう。
柔らかい土の道を歩いているだけでは、
わが妻のしおらしい足音は、
その音量の大方を失ってしまいます。
つまり、いまや妻の足音は、
後ろを振り向けない私に対して、

「私はここにいますよ」という伝達を、
もはや、ほんの一言たりとも、
伝えなくなってしまったのです。

ディオニュソス　そういうことか。言われてみれば当然の話だ。

オルフェウス
そこからの私の心は、それこそもう
不安と疑心暗鬼の塊のようなものでした。
そこに妻がいるということの一切を、
もはや感受することが出来なかったからです。
ああ、せめてエウリュディケが、
その小鳥のような小さな声だけでも、
発することを許されていたならば……

しかもです。わが妻エウリュディケを、
「生者の国に返してやる」と約束したのは、
その傲然たる態度や言葉遣いを、
いっさい隠そうともしなかった、
あの奢れるハデスであるのです。
かつてディオニュソスさまに対しても、
「相手が半神ならば、神としての誠実さなど、
別に見せる必要もあるまい」
と、そのように言い放ったハデスなのです。
ならば人間である私との約束など、
それを全くの反故にしたところで、
そこに奴めが、何の後ろめたさや後悔を、
感じることがありましょうや。

そして、このようなことを考えているうち、
私には、自分の背後に妻があることが、
どうしようもなく疑わしいこととして、
感じられるようになっていきました。
そうして、その強い疑念が私をして、
衝動的に後ろを、エウリュディケのほうを、
にわかに振り向かせてしまったのです。

ディオニュソス　おお、お前は振り向いてしまったのか！

オルフェウス
　そうです、私は振り返りました。
　そうして振り返ってみると、そこには、
　エウリュディケが確かに「いました」。
　ハデスは、あの約束を自分のほうからは、
　決して反故にはしていなかったのです。
　他方、妻の表情は、灰ざめた驚き、落胆、
　そして、とこしえに深い悲しみへと、
　次々に移ろい変化していきました。
　それは、ほんの一瞬の間に生じた移ろいです。
　そして最後に、氷のように冷たく悲しい、
　惜別の涙を浮かべたかと思うと、
　エウリュディケの体は霧のごとく、
　あるいは風のように消えていきました。
　このようにして私は、ついに、
　あの愛する妻を、永遠に失ったのです。

ディオニュソス　ああ、悲しい話だ。悲しすぎる話だ。

オルフェウス
　その後、よろめきながら歩いているうち、
　洞窟であり通路である坂道に、いつしか、
　地上の光が差し込むようになりました。
　しかし、その光を浴びて歩く私の心は、
　すでに永久に、愛する妻という、
　光を失ってしまっていたのです。

モルティ　よくは分かりませんけど、きっと、とても可哀そうな方。

アポロンとオルフェウス

ディオニュソスたちと、オルフェウスの生首との対話が続く。

ディオニュソス　オルフェウスよ、お前と冥府に降ってから、およそ一年あまりにもなる。この間、お前の心には、何の救いもなかったのだろうか。

オルフェウス
いいえ、私の魂を救ってくださった方が、
たしかにお一方だけおられました。
私の主人と言ってもよい神であり、
かの遍昭せし白日の太陽神、
つまり真昼の支配者であられる、
ポイボス・アポロンさまでございます。
この神は、打ちひしがれていた私のために、
亡き妻と再びまみえるための教えを、
丁寧に、諄々と説いてくださいました。
ですが実のところ……
その新しい教えによってこそ、
私は殺され、かような生首となったのです。

シレノス　アポロン神のもとで、この御仁に、いったい何があったというのでしょう。

オルフェウス
それは、あなた方には関係のないこと。
……いや、関係ないこともないかもしれぬ。
私はアポロンさまとディオニュソスさまの、
その協働の力によって、こうした無残な、
生首の姿となってしまったのですから。
とはいえ、その死にざまの顛末こそは、
あなた方にとり、知る必要のないことです。

ディオニュソスだが、たったいまお前は、私が、お前をこんな姿に変えた「顛末」に加担したと言ったではないか。その言葉の意味することは、やはり気にかかる。

オルフェウス
そこは本当に気にする必要がないのです。
このオルフェウスという人間のなかに、
ディオニュソス教の教主たるあなたへの、
暗い怨恨がある訳ではないのです。
怨恨がないどころか、むしろ私はいま、
ある種の充実感さえ持っているのです。
なにしろ私は、今や妻エウリュディケと、
ほぼ同種の人間となっているのですから。
この姿であれば、あの渡し守のカロンに、
「死者でもない者が、何をしにここへ来た」
などと嫌味を言われる惧れもありませんし、
三つ首のケルベロスが待ち受ける、あの、
特別ルートを課される心配もありません。
いまや私は、自分自身が望むまま、
誰かれに阻まれることもなく、
あんなにも会いたかったエウリュディケと、
心ゆくまで再会することが、
出来るようになったのです。それは、
なんと悦ばしいことでありましょうか。

ディオニュソス　いや、なら、なおのこと解せんではないか。では、どうして生首なんぞになってまで、お前はわざわざ、私のもとまでやって来たわけなのだ？

オルフェウス
これが私の「最後の務め」だからです。
あなたもご存じのとおり、
私はアポロンさまから竪琴を頂きました。
この竪琴による伴奏がなかったならば、
私の詩と歌による協奏の芸術は、
決して完成しえなかったことでしょう。
ゆえに私は、竪琴の「もとの持ち主」には、
いくら感謝してもしきれない、

そうした深い恩義の気持ちを持っています。
その気持ちに一切の偽りはありません。

とはいえです。実はアポロンさまも、
竪琴を、ご自身で作った訳ではないのです。
つまりアポロンさまもまた、あの竪琴を、
ある方から「譲り受けた」のでございます。
だとしたら、その「ある方」に対する恩義は、
私のなかで、アポロンさまに対するそれを、
「ものの所有の正統性」の観点からして、
より上回るものがあるのではないでしょうか。

そして、私がこのような姿になってまで、
ディオニュソスさまのもとに訪れたのは、
まさに、その「竪琴のおおもとの持ち主」に、
最終的なご奉公をするためなのです。

ディオニュソス　それはどういうことなのだ？

オルフェウス
かの方は、あなたさまとアポロンさまの、
大いなる邂逅を望んでいらっしゃいました。
しかしながら、あなたも知るとおり、
ディオニュソスとアポロンとは、それぞれ、
世界で最も離れたところに位置している、
まさに極点対峙の二つ神であります。
そして、そうした二神が邂逅するためには、
どうしても強靭な「媒介」が必要であり、
かの方は、その稀少なる媒介役として、
この不肖オルフェウスを選ばれたのです。

ディオニュソス　つまり「私とアポロンを仲立ちする力」としてのオルフェウスということか。

オルフェウス
そうです。すでにアポロンさまの許には、
私の愛器である竪琴が届いているはずです。

そうして私の体の一部であった竪琴は、
遠いこの場所で歌っている私の声に、今も、
それに相応しい和声を付しているのです。
ここから聞こえなくとも、見えなくとも、
それは疑いようもなく堅い事実です。

とはいえ、歌と伴奏とは、本来ならば、
一つの場所で奏でられてこそ、和声的に、
その正当なる役割を果たすもの。
よって、歌と伴奏という二つの要素を、
一つどころに引き寄せようとする摂理、
すなわち和声の摂理が、
私の声と竪琴を、ひいては、
あなたさまとアポロンさまとを、
どこか一つの「あるところ」で、
結束することになるでしょう。

アポロンとディオニュソス

ディオニュソスと、オルフェウスの生首との対話が続く。

ディオニュソス　お前は「私とアポロンとの接近」を予告しているようだが、それはいつの日か、つまり今より遅延して訪れるものなのか。それとも今にも早々に起こることなのだろうか。

オルフェウス
早々にです。ですからディオニュソスさま、
どうか私の顔を、両手で掴んでくださいまし。
私があなたさまを、アポロンさまの住む、
かの遠方の地デルフィまでお運びしましょう。

ディオニュソス　こうか？

〔ディオニュソスが両側から挟むようにして、オルフェウスの首を掴む〕

オルフェウス
　では行きましょう。

〔オルフェウスの首を掴んだディオニュソスの体が、少し宙に浮きあがる〕

シレノス　ま、待ってくれ。わしたちは置いてけぼりなのか？　せめて、わしとマイナスたちぐらいは、お供をさせては貰えんだろうか。一人で行かれてしまっては、ディオニュソスさまの身が心配でならん。

ディオニュソス　大丈夫だ。私はオルフェウスを信用する。

オルフェウス
　いえ、いいでしょう。
　どうしても付いてきたいという方々は、
　ディオニュソスさまの体を掴んでください。
　その人たちごと、
　デルフィに連れていきます。

ディオニュソス　では、その言葉に甘えるとしよう。

シレノス　よし、モルティ、フィカー、ニグ、レド、ディオニュソスさまのお体にしがみつけ。

〔シレノスとマイナスたちが、ディオニュソスの体を囲うように掴む〕

モルティ　でも、ずっと掴んでいられるかしら。途中で落ちてしまわないかしら。

オルフェウス
　大丈夫ですよお嬢さん。私の力が、
　皆さん全体を支えますから。
（ディオニュソスに）
　では行きますよ、飛びます。

ディオニュソス　ああ、任せる。（アケテスに）信者たちのことはお前に一任する。

アケテス　はい、お任せください。

オルフェウス
　では、いざデルフィに。

〔オルフェウスの首を掴んだディオニュソスと、そのディオニュソスの体を掴んだ一行が、空を飛んでゆく〕

第６章　竪琴とアポロン

登場人物

ピュティアたち　ピュティアとは、アポロンに仕える巫女のこと。デルフィの巫女とも呼ばれる。彼女らは、三本足の椅子に座り、パルナッソス山の火口から吹き上がるガスを吸ってトランス状態になる。そのときに彼女らが口走る譫言を、解釈者（男性）が「予言」として信者に啓示する。ピュティアたちの名は、チェリア、セフィーネ、ペレイネー。

チェリア　ピュティアのひとり。その姿は『アトラス』のチェリアと同じでよい。ただしギリシア風の衣服を着ている。

セフィーネ　ピュティアのひとり。その姿は『アトラス』のセフィーネと同じでよいが、ここではチェリアとの母子設定はない。年齢もチェリアと同年代。

ペレイネー　ピュティアのひとり。

アポロン　ピュティアたちを統べる太陽神。予言の神、音楽の神。

ヘルメス　使者の神。オリュンポス十二神のなかでは最年少である。

ヘルメス・トリスメギストス　三倍も偉大なるヘルメス。トリスメギストスと表記。

デルフィのアポロン神殿

アポロンが柱廊に寄りかかって座っており、その腕にはオルフェウスの竪琴が抱えられている。この竪琴は、トラキアで死んだオルフェウスのもとから、デルフィの地へと自律的に飛んできたものである。

現況その竪琴は、誰も弾くこともなしに音楽を奏でており、アポロンは苛立たしげに、その音の連なりを聞いている。そんなアポロンに、三人のピュティアたちが近づいていく。

チェリア　先ほどから、ずっと竪琴が鳴っているのですね。私は最初、てっきりアポロンさまが弾いてらっしゃるのかと思いました。でも、どこかメロディラインがオルフェウスさまを感じさせるので、おやと思って来てみたのです。

アポロン　たしかに私は弾いていない。不可思議にも、勝手に竪琴が音楽を奏でているのだ。そして、これがオルフェウスの竪琴であることには間違いがない。

セフィーネ　ですが、肌身離さず竪琴をお持ちでしたオルフェウスさまは、今ごろ遠いトラキアにおられるはず。そのオルフェウスさまの竪琴が、どうしてここにあるのですか。

アポロン　最初に言っておこう。オルフェウスは死んだ。

チェリア　なんですって！

アポロン　いや、どうやら死んだらしい。らしい……か。この全知全能とも讃えられる神アポロンが、今は「らしい」などという、不確定な言葉を使わなければならないとはな。

ペレイネー　本当に変ですよ。アポロンさま、一体どうなされたのです？

アポロン　自分でも分からない。オルフェウスが死ぬ少し前から、あやつの存在が、厚い幕で仕切られたように、急に、何ひとつ把握できなくなってしまったのだ。

チェリア　……一体なにが起こっているのでしょう。

アポロン　全くもって分からない。とにかく、それ以降の私には、己の自由にならない事ばかりが起こっているのだ。それにつけても、私がオルフェウスの死を予知できなかったことは、かえすがえすも口惜しい。それを予知できていたならば、きっと、やつを助けることも出来たものを。

チェリア　まことにそうです。

アポロン　自由が利かないということが、こんなにも苛立たしいものだとは！

セフィーネ　おいたわしい。どうかお心を静めてくださいませ。

アポロン　それは無理だ。不甲斐ないことに、私には、この竪琴の音を止めることすら出来ないのだからな。

セフィーネ　ああ……

アポロン　そもそも、この竪琴のもともとの持ち主は私なのだぞ。その元来の持ち主が命じても、一向に竪琴は鳴りやまない。私には、この音が、オルフェウスの恨みつらみに聞こえて仕方がないというのに。

チェリア　恨みつらみとは？

アポロン　つまり私には、この音が「アポロンさま、どうして私を助けてくださらなかったのですか」というオルフェウスの怨嗟に聞こえるのだ。

チェリア　それは考えすぎですよ。オルフェウスさまは、衷心からアポロンさまを慕ってらっしゃいました。何が起きようとも、オルフェウスさまが、アポロンさまを恨むなどということはあり得ません。

アポロン　ならば、なぜこの竪琴は、私の望みを受け容れてくれないのだ？　私はこの音が消えてくれることを、心から望んでいるのに。

ヘルメスの登場

突如として、アポロンの背後にヘルメスが現れる。

ヘルメス　それは、お前よりも真実に「その竪琴の持ち主である私」の意図するところによる。

アポロン（振り返って）ヘルメスではないか。突然に現れて何なのだ！　しかも貴様、いま私のことを「お前」と呼んだか？　弟のぶんざいで、何という口の利きかたをするのだ！

〔ヘルメスは何も答えず、ただ凄むようにアポロンを見る〕

アポロン　む……それは確かに、この竪琴は、お前から譲り受けたものだ。生まれたばかりのお前が、私の飼牛を盗んだ時のことだったな。その窃盗が露見したときに、私はお前から「詫びの品」として、この竪琴を譲り受けたのだ。

ヘルメス（威厳を保って）いかにも。

アポロン　いや、この楽器を発明したのもお前なのだから驚く。だが、それでもお前は、私の末の弟ではないか。その弟が、兄よりも偉そうな口ぶりや態度を取るのはなぜだ？

ヘルメス（それでもなお威厳を保って）たしかにヘルメスは、神々の歴史のなかに「赤ん坊の時代」を刻んでいる。

アポロン　うん？

ヘルメス　しかし、その不自然なまでの早熟ぶりには、赤子のヘルメスの背後に、すでに完成している別のヘルメスがいること。つまり年齢を超越した「第二のヘルメス」がいることを予想させはしまいか。

アポロン　お前は何を言っているのだ？

ヘルメス　つまり、私がそれなのだよアポロン。私はヘルメス・トリスメギストス。三倍も偉大なるヘルメスである。そなたには、初めてこの姿を見せるな。

〔若者としてのヘルメスから、老人としてのヘルメスに変容する。その間に、神々しく強い光を放つ〕

アポロン　何たる荘厳な輝き……その姿の、何たる威容。

〔アポロンは目もとに手をかざし、ピュティアたちは、たまらず平服する〕

トリスメギストス　私は、天界、地上、地下世界の三つを掌握するがゆえに「三倍も偉大なるヘルメス」と呼ばれる。そして、世界の背後から神々の歴史を司るがゆえに、至高の神でもある。あのゼウスですら、私にとっては、歴史を動かすための持ち駒にすぎない。

アポロン　そ、そんな神がいたのか。

トリスメギストス　そして、オルフェウスの竪琴の大本の、真実の持ち主は私なのだ。なにしろ発明者にして製造者なのだからな。だからこうして……

〔トリスメギストスが竪琴に触ると、それまで自律的に響いていた音が鳴りやむ〕

セフィーネ　竪琴の音が消えたわ！

アポロン　では、オルフェウスの死に際して、私の予言の力を封印したのも、あなたなのか。

トリスメギストス　そうだ。より神格の高い神が立案した未来計画は、低次の神には予知することが出来ないのだよ。

アポロン　この私を低次の神と言うのか。いや……まあ相対的に見ればそういうことになるか。で、あなたが立案した未来とは何なのだ？　私に何をさせるつもりなのか。

トリスメギストス　わしは今日、お前とディオニュソスを会わせる。そして、お前たち二人によって、真の意味における「マンダラ」を完成させるのだ。

アポロン　ディオニュソスですって？　あの低劣にして怪異の者と私を会わせて、あなたは一体何をしようというのです。

トリスメギストス　低劣にして怪異……そのように侮蔑しても、ディオニュソスがお前にとって、最も重要なパートナーであることは、神学的に疑いようもないことなのだ。しかもディオニュソスのほうでは、既にそのことに気がついている。

アポロン　私には意味が分かりませぬ。

トリスメギストス　畢竟、お前が司る「存在の理法」と、ディオニュソスが司る「虚無の理法」は、この宇宙を構成する、まさに二つの極点なのだ。二極点であるがゆえに最も遠く離れ、二極点であるがゆえ、たがいに最も反目しているのは事実だが。

アポロン　ええ。ディオニュソスとは、たとえ会ったことがなくとも反目せずにはいられません。奴に対しては、何やら先天的で本能的な憎しみが湧いてくるのです。

トリスメギストス　それは仕方がないことだと言えるだろう。しかしながら「存在」と「虚無」とは、間違いなく、最も遠く離れた二原理。そうであるがゆえに、もしもその二つが重なり合ったときには、それこそ宇宙全体をカヴァーする「最終原理」が現出することになる。

アポロン　最終原理？

トリスメギストス　そしてわしは、その最終原理が世に現れる時を、今日という日に定めたのだ。

アポロン　何のことやら、私には全く分かりません。分かりませんし、あなたに何を言われようとも、私

はこの地に、ディオニュソスを迎え入れる気など、毛頭ありませぬ。

トリスメギストス　しかし私は、すでに抜け道を用意してあるのだ。（平服しているピュティアたちに）デルフィの巫女であり、アポロンの巫女でもあるピュティアたちよ。お前たちは知っているだろうか。自分たちの祖先が、アポロンに仕える者である以前、その名のとおりに、ピュトンに仕える巫女であったことを。

アポロン　ピュトンというと、私がこの地に封じ込めた、ヘラの遣い蛇……

トリスメギストス　そう、そのピュトンだ。そしてピュトンは、封印されているだけで、死んでいる訳ではない。このデルフィの地下では、今もピュトンの体が、長々とその体を伸ばしているのだ。

チェリア　本当ですか？

トリスメギストス　ピュティア・チェリアよ、そのピュトンの体を通って、ディオニュソスを迎えにゆけ。そして再びピュトンの体を通って、ディオニュソスをこの地まで連れてくるのだ。

〔トリスメギストスがチェリアを見つめると、彼女の瞳が赤く変色する〕

チェリア　かしこまりました。では聖山パルナッソスの火口へと参ります。（と言って退場）

アポロン　何が……何が起ころうとしているのだ……

トリスメギストス　お前はわしとともに、少しばかりここで待つがいい。もうすぐ全身全霊をかけたイニシエーション（儀式）が始まるのだから、今のうち充分に休んでおれ。

第7章　ピュトンとピュティア

登場人物

オルフェウス　今や生首となった詩人。オルフェウス教の教祖。

シレノス　半人半獣の老人。ディオニュソスの従者。

ディオニュソス　ぶどう酒の神。虚無の神。

モルティ　マイナスのひとり。

チェリア　デルフィの巫女であるが、ここではピュトンに仕える巫女の子孫。

☆**レト**　ゼウスとの間に、アポロンとアルテミスを生んだ女神。

ピュトン　レトに嫉妬したヘラが、ゼウスの浮気相手を抹殺するために送った、大蛇の化け物。

※☆は、この物語に直接は現れない登場人物。

デルフィが遠景として見える土地

オルフェウスの首に導かれ、空から地上に降りたったディオニュソスの一行。遠くを眺めると、そこに美しい山稜と、その山裾に設えられた神殿が見える。

オルフェウス
　あれがパルナッソス山です。
　そして、その麓に建っているのが、
　わが主の住まわれている、
　アポロン神殿に他なりません。

シレノス　つまり、あそこがデルフィの神域なんじゃな。

オルフェウス
　そうです。あそこが私たちの、
　旅の目的地であるのです。

ディオニュソス　だが、私は感じるのだ。自分がこれより先には進めないということを。まるで目前に境界線が引いてあるかのようだ。あの土地は明確に、この私という存在に敵意を持っている。

オルフェウス
　言うなれば、結界が張ってあるのです。
　冥府下りのさいにお伝えしたように、
　アポロンさまは、あなたに対して、
　強い拒否反応を示しておられます。
　そのためアポロンの聖地までもが、
　主の忌避感覚、あるいは排斥性に、
　鋭く感応してしまっているのです。

モルティ　とはいえ、このままではアポロン神に近づくことも出来ませぬ。

ディオニュソス　むう……

〔ディオニュソスが目先の空間に手を伸ばしてみる。すると指先が光り、その辺りを中心にして、オーロラのような光の膜が広がる〕

オルフェウス（その光の膜を見ながら）
　おお……私としましても結界が、
　こうも強固なものとは思いませんでした。
　なにぶんディオニュソスさま御本人を、
　ここデルフィにお連れするのは、
　生まれて初めてのことでしたから。

ディオニュソス　さて、どうしたものかな。

シレノス（手を伸ばしながら）どうしたもんでしょうなあ。信徒のわしがやっても、やっぱり膜が出てきますからなあ。うーむ。

〔そのとき、一行の背後から話しかける者が現れる〕

チェリア　お困りでしょうか。

ディオニュソス（振り返って）あなたは？

オルフェウス　おお、ピュティア・チェリアではありませんか。

シレノス　ピュティア？

オルフェウス
　ええ、ピュティアです。
　ディオニュソスさまに巫女が付くように、
　アポロンさまにもまた、マイナスの如き、
　中心的な巫女が付き従うのです。
　それが三人のピュティアたちで、
　俗にいうところの「デルフィの巫女」です。
　そして、かかるチェリアどのは、
　そのうちのリーダーであられるのです。

モルティ　あたしたちと同じような巫女ってわけね。でも随分と乙に澄ましてるわ。

シレノス　いや、澄ましてもおられんようじゃぞ。

チェリア（震えながら）オルフェウスさま……何という変わり果てたお姿に。

シレノス　ああ、たまげるのは当然じゃわい。なにしろ生首じゃからの。

オルフェウス
　ピュティア・チェリアよ、
　どうか、そんなに驚かないでください。
　と言っても無理でしょうけれども……
　でも、もう痛みは全くないのです。

チェリア　それで痛くないのですか。

オルフェウス
　ええ。私を生かしめている神様が、
　とうに痛みを除いてくださいました。
　とはいえ、見てのとおりの体です。
　このたびの役割を果たしきれば、
　即座に冥府へ降れる身となりました。
　そして今度という今度は、
　誰にも邪魔されず、エウリュディケと、
　相まみえることが出来るのです。

チェリア　……は、はい。

オルフェウス
　そのときのためにも、
　後塵の憂いがないよう、今どうしても、
　ここでやっておくべき事があるのです。
　ピュティア・チェリアよ、
　そのための力添えを、私たち一行に、
　いま大困難の前にある私たち一行に、
　貸し与えてはもらえないだろうか。

チェリア　ああ、もともとそうするつもりなのです。私は至高の神により、まさに、そのために遣わされた者なのです。

ディオニュソス（独白）至高の神？　うん？　まさかあの神のことか？

モルティ　一体どういうことなの？

チェリア　私が皆さんを、アポロン神殿の側までご案内するということです。

シレノス　でもどうやって？　道案内されたとて、そもそもわしらは、デルフィの神域に入ることが出来ないんじゃぞ。

チェリア　問題ありません。私がここまで来るために通って来た「地下道」がございます。

ディオニュソス　地下道ですと？

チェリア　そうです。皆さまがたは、その地下道を、私が通ってきたのと反対向きに進んでゆけばいいのです。地下道は、パルナッソス山の火口までつながっています。

シレノス　なんと！

チェリア　この地下道の中には、アポロンさまの意志も届きません。なにしろアポロンさまは、この「地下道」を殺せず、封印しただけなのですから。

ディオニュソス　地下道を殺す？

チェリア　それについては追々。そして地下道の入り口は、結界の内側ではなく、外側にあるのです。

シレノス　おお、ならば地下道を利用することに問題はないのう。

オルフェウス
　ところでピュティア・チェリアよ、
　主の忠実な端女であるあなたが、
　どうしてアポロンさまの意志が届かない、
　抜け道などを知っているのでしょう。

チェリア　そこに至高の神の意図が反映しているからです。すべては地下道のなかで明らかになるでしょうから、どうか今は、ただ私の案内に付いて来て下さいませ。

オルフェウス
　行きましょうディオニュソスさま。
　ピュティアは信用するに足りまする。

ディオニュソス　よし行こう。巫女よ、案内を頼む。

地下道の中

すでに一行は、地下道のなかを歩いている。チェリアが先導するすぐ後ろを、オルフェウスの首を持ったディオニュソスが歩く。そのあとにシレノスやマイナスたちが続く。

オルフェウス
　ディオニュソスさま思い出しませんか、
　ケルベロスが守る地下通路のことを。
　冥王ハデスの王宮までの難多き道のりを。

ディオニュソス　たしかにそうだな。だが今は思うのだ。結局のところ、私とハデスとは、地下の神としては同質であったのだと。そして、その同質性によるシンパシーもあったのだと。

シレノス　と言いますと？

ディオニュソス　そうした地下神ハデスと比べて、アポロンは、天空に光る太陽の神だ。そして地下の神と天空の神とでは、私に対する「敵意」が段違いに異なってくるだろう。そこには欠片ほどのシンパシーも、生じる余地がないからな。

シレノス　つまりアポロン神は、まったく油断ならぬ相手であると。

チェリア（振り返って）みなさま、足元に気をつけて下さいまし。

シレノス　うむ。それにしてもチェリアどの、この地下道のなかは、何だか生臭いのう。

モルティ　ほんと臭い。

チェリア　それはそうでしょう。実はこの地下道は、いにしえの大蛇ピュトンの体躯そのものなのです。私たちは今、ピュトンの食道や腸内を歩いているのです。

シレノス　はあ！　なんじゃい。じゃあ、わしらは大蛇の餌なのか？

チェリア　いえ、ピュトンに私たちを食べる意志はありません。ピュトンはあくまで、至高の神の意向に沿って「通り道」の役割を果たしているだけなのです。ですから、どうか心配なさらないで下さい。

モルティ　でも、口から入ったなら、出口は肛門でしょう。消化されないで肛門から出ることが出来るものなの？

シレノス　わしは、そもそも肛門から出たくない。さすがにウンコはいやじゃ。

チェリア　大丈夫ですよ。だって私は、実際にこの地下道を反対から通って、皆さんに会ったのですから。それはこの地下道に、ちゃんとした出口があるということではありませんか。

モルティ　まあ、そうだけど。

チェリア　それとピュトンには肛門はありません。底なしの胃袋が、排泄物さえ生み出さないからです。ですから、頭にも尾にも顔と口があるんです。

ディオニュソス　顔が二つの巨大な蛇というわけか。

チェリア　そう。顔の一方は、さきほど通った地下道の入り口であり、もう一方の顔は、パルナッソス山の火口に、それこそ顔を出しています。

オルフェウス
　それを聞いて安心した。
　しかしピュティア・チェリアよ、
　アポロンの巫女たるあなたに、
　このような不気味な大蛇と、
　どのような関わりがあるのだ？

チェリア　オルフェウスさま、実はその関りはとても深いのですよ。ええ、私たちとピュトンとは、切っても切れない関係にあります。

ディオニュソス　というと？

チェリア　デルフィの巫女の役割は、アポロンさまから与えられる予言や占いを、民草に伝えることにあります。しかし、その際にピュトンの協力なくば、私たちは、予言や占いを行える神秘状態に、トランス（移ること）することが出来ないのです。

ディオニュソス　どういうことだ？

チェリア　私たちピュティア（ピュトンの巫女）は、予言を行うさいに、パルナッソス山の火口に三つ足の椅子を置きます。そして、その椅子に座った私たちは、アポロン神に祈って「神秘のガス」を頂くのです。

モルティ　何よ、その神秘のガスって？

チェリア　私も今回はじめて知ったことなのですが、これは火山ガスではないのです。実は、火口の下のほうで顔を出している、ピュトンの息だったのです。ピュティアは、そのピュトンの息を吸い込むのです。

ディオニュソス　ほう、息をとな。

チェリア　この神秘のガス、いえ「神秘の息」には、強い催眠効果があります。これを吸うと、人は容易にトランス状態に陥り、デルフィの地に漲る、アポロンさまの叡智と感応できるようになるのです。

モルティ　ふーん。

チェリア　そしてアポロンさまこそは、言わずと知れた予言と占いの神。私たちは、その職掌の分け前に与るというわけです。

オルフェウス
　そういうことだったのですか。
　かかるピュティアの秘密、
　私も初めて知りました。
　大変興味深いお話でありました。

チェリア　もちろんアポロンさまと私たちとでは、神と人間という大きな差異があります。予言の精度は問題にもならないし、トランス状態で私たちが話す予言や占いは、説明というよりは、細切れの謎めいた言葉、あるいは譫言であるに過ぎないのです。

モルティ　アハハ、似てる似てる！　酔った状態での譫言なら、私たちマイナスだって言うわ。私たちにとってのブドウ酒が、あなたたちにとってはピュトンの息なのね。

チェリア　……ブドウ酒というものを、私は嗜んだことがありませんが。

ピュトンとアポロンの物語

地下道内における、一行の対話が続く。

ディオニュソス　しかし、そもそもどうして、聖も聖なるデルフィの地に、このような大蛇がいるのだ？

ピュトン　それは私から説明いたそう。

オルフェウス
　何者の声だろう。まるで、
　地下道の全体から響いてくるようだが。

チェリア　この声は、きっとピュトン本人のものです。私も初めて耳にしますわ。

ディオニュソス　それは面白い。大蛇が自分で、私の質問に答えてくれるのか。ならば教えてくれピュトンよ。そなたは、どうしてここにいる？

〔ディオニュソスの一行、歩きながらピュトンの話をきく〕

ピュトン　その質問に答えるため、お前たちに太古の歴史を紐解いてやろう。

ディオニュソス　ほう、それは興味ぶかい。

シレノス（おどけて）紙芝居の始まり始まり。

ピュトン　はるか昔にワシは、ヘラ女神の命を受けて、レトを追い回した。レトはのちに、アポロンとアルテミスの母親となるニンフじゃ。ワシが追い回したのは、その二神を妊娠している時のレトじゃった。

ディオニュソス　ヘラに命じられて……となると、レトを妊娠させたのは当然ゼウスだな。つまりレトは、ヘラに殺された我が母と、同じような立場にあったわけだ。

ピュトン　そうなのか。でも夫の浮気相手に対するヘラの仕打ちは、いつの世でも同じようなものじゃ。執拗で残酷。しかも常軌を逸しておる。

ディオニュソス　フフ、よくご存じで。

ピュトン　当時のワシは、そんなヘラの忠実な兵士じゃった。よって、命じられるがままに、レトを追い回したのだ。ずっとずっと、なぶるように。一気に食い殺しはせずにな。

ディオニュソス　聞いていて気分が悪いな。本当に、母と自分の災厄を思い出す。

ピュトン　しかし、レトがデロス島に逃げ込んだときに、ワシは、かの妊婦を見失ってしまった。ワシが上陸する前に、ゼウスが、デロス島の「根」を切ってしまったからじゃ。

シレノス　島の根？

ピュトン　その時からデロス島は浮島となり、まるで船のように海を漂った。要するにワシは、島ごとレトを見失ったのじゃ。そしてレトは、かかる浮島で、どうにかアポロンとアルテミスを産んだのだった。

ディオニュソス　私も同様だが、ゼウスの庶子は、生まれてくるだけでも一苦労だな。

ピュトン　けれども、立場が逆転する時が来るんじゃな。すなわちアポロンが成長すると、今度は、アポロンによるワシへの復讐が始まった。

モルティ　あらまあ、因果応報かしら。

ピュトン　アポロンは「かつて母親を苦しめた悪者を殺してやる」と、それはそれは血気盛んじゃった。偉大な神でも、その本性は、まだ分別の足らぬ子供だったのじゃろう。そうして弓の名手だったアポロンは、ワシを目がけて無数の矢を放ってきた。

オルフェウス
　おお、それは大きすぎる代償だ。
　かの神の矢に逆らえる者はいない。
　立ち向かうことが叶わぬなら、
　誰にせよ逃げるほかはない。

ピュトン　もちろんワシだって逃げたわい。じゃが、巨大な怪物であるワシには、体に見合った逃げ場

所とてなかった。とどのつまり、そのときワシは、地上を這いずり回ることしか出来なかったんじゃ。

ディオニュソス　それでは格好の標的ではないか。

ピュトン　いかにもそうじゃ。のたうつワシに向かって、アポロンは嬲るように矢を放ったものよ。

モルティ　それも因果応報かもしれないけど、何となく陰気ねえ、アポロンて。

チェリア　そんなことはありません。

ピュトン　じゃけれども、このデルフィだけはワシを迎え入れてくれた。なにしろ、この地には大地母神ガイアがおって、このガイアこそは、ワシの実の母親なのじゃからのう。

モルティ　そうなのね。

ピュトン　母は息子を哀れに思い「さあここに」と言って、ワシを地下に潜らせてくれた。そうやってワシを、あのアポロンから匿ってくれたんじゃ。

ディオニュソス　ふーむ、ガイア、レア、キュベレー……一つの大地が持つ、幾つもの名前なのかもしれないな。

ピュトン　ところがじゃ。アポロンは、ワシが地下へ潜っていくのを見つけると、そのとき獲物を取り逃がす危惧を感じたのじゃろう。最早じっくりワシを料理するのを止めた。

ディオニュソス　というと？

ピュトン　つまり即座にワシの息の根を止めることがアポロンの目標となったんじゃな。それで奴めは、急に、本当に豪雨のような矢を放ってきた。

シレノス　せっかくの好機を失いたくなかったんじゃろうな。

ピュトン　大地に潜り切らないワシの体は、アポロンが放つ矢でハリネズミのようになった。それでも何とか地下に潜りきると、ワシが流した血が、地下でマグマとなった。また、ワシが潜ったために盛り上がった土は火山となり、ここにパルナッソス山という霊峰が生まれたのじゃ。

ディオニュソス　それがここなのか。

ピュトン　そう。そうしてワシは、そのまま死ぬはずだった。本当に満身創痍でボロボロじゃったからな。アポロンもまた、ワシが死ぬまで追撃の手を緩める気はなかった。

チェリア　でもピュトンさまは、今も生きてらっしゃる。

ピュトン　それはワシが死ぬまえに、母ガイアがアポロンを諌めたからじゃ。ガイアはアポロンに「ヘラに命じられて『役目』を果たしていただけの我が子を殺すとは何事か！」と凄んだんじゃ。

シレノス　ほほう、ガイアもけっこうな子煩悩だったらしい。

ピュトン　神々の母とも讃えられるガイアが相手では、凄まれたアポロンも、さすがにもシュンとならざるを得ない。奴は追撃をやめ、かえってガイアに許しを請うた。

チェリア　ガイアさまは、すぐに、アポロンさまを許してくださったのですか。

ピュトン　いや、なかなか許さなかったともよ。フェフェフェ。そのためアポロンは、ガイアの怒りを鎮めるために神殿を捧げ、ワシに対しては三人の巫女を捧げた。これが後にデルフィの巫女、あるいはピュティアと呼ばれるようになる女たちだ。ここにおるチェリアなどは、もう何代もあとのピュティアじゃがな。

チェリア　そうなのですね。

ピュトン　いずれにせよ、そのとき以来デルフィでは、アポロンとガイア、そしてワシとの奇妙な共生が始まったのじゃ。

ディオニュソスと蛇

地下道内における、一行の対話が続く。

ディオニュソス　なるほど。では、もう一つ尋ねてもいいだろうか。ピュトンよ、どうしてあなたは、私たちを助けてくださるのか。

ピュトン　至高の神に命じられたから、と言えばそれまでだが、もう一つの理由がなくもない。ディオニュソスよ、ワシはお前に親近の情を持っておるのだ。

ディオニュソス　私に親しみの気持ちを？

ピュトン　ああ。言うまでもなくワシは大蛇だが、蛇というものは地を這い、ときに地に潜るものじゃ。

ディオニュソス　ええ、そうですね。

ピュトン　そして地下に潜るものは、その地下の奥底で一つの真理に出会う。ディオニュソスよ、お前もまた、地の底の底で「死と再生」の真理に出会ったはずじゃ。それこそ蛇のように地下に潜ったときに。脱皮し再生する蛇のごとき真理に。

ディオニュソス　ああ……

ピュトン　それゆえディオニュソスよ、お前はいつしか、蛇の化身のように言われるようになるだろう。つまり「蛇＝ディオニュソス」の図式じゃな。蛇であるワシが、お前に親近の情を抱くのはそのためじゃ。いつか必ず、蛇はお前の象徴となり、同時に、暗闇の知恵や、地下に眠る真理の象徴ともなろう。

ディオニュソス　それが私と蛇の親近性か。なるほど。

オルフェウス
　ところで、これまでは、
洞窟全体からピュトンの声が響いていた。
　ところが先ほどからは、もう一か所、
その声の発生源があるようにも感じるのだ。
二つの音の波が干渉しあって、
なんとも奇妙な響きを醸し出している。
これは人より敏感な私の耳には、
かなり不快だと言わざるを得ない。
　いったい何なのだろう、この奇妙な現象は？

チェリア　さすがは音楽家の耳ですね。微かなハウリングの兆候を察知していらっしゃる。

モルティ　どういうこと？

チェリア　つまりピュトンは、お腹で言葉を発しているのではなく、ちゃんと口で話をしていたのです。でも、その声がお腹に伝わって、まるで地下道全体から声が響いているようになっていました。要するに、一種の反響ですね。

シレノス　ほうほう。

チェリア　けれども今は「音源」が近づいてきたので、反響と音源のハウリングが起きてしまっているのです。そろそろ、オルフェウスさま以外の方にもわかるでしょう。ピュトンさま、少しお話いただけますか。

ピュトン（棒読みで）これを喋っているのは、ワシのもう一つの顔であるぞよ。

シレノス　ああ、このエコーがかった響きか。わしにも分かるぞ。

ディオニュソス　そして、まもなく出口（ピュトンの口＝音源）なんだな。

チェリア　そうです。そしてピュトンの出口側の顔は、パルナッソス山の火口に首を出しています。ということは、私たちはもう、デルフィという土地の、中心部に入っていることになるんです。

モルティ　ほら見て下さい。あれってピュトンの歯なんじゃないですか。

シレノス　大蛇の顔であり、口である辺りまで来たということか。

ディオニュソス　そして今やアポロンの懐に入ったということだな。心せねば。

ピュトン　パルナッソス山の火口に首を出していると言っても、いつもは、下のほうでちょっとだけ顔を出しているだけだ。だが、今日は鎌首を持ち上げて、お前たちを山頂まで運んでやるとしよう。

ディオニュソス　あなたのいいようにやってくれ。

ピュトン　よし、では少し揺れるぞ。それ！

〔ピュトンが首を持ち上げ、口腔内のディオニュソス一行を、一気にパルナッソス山の火口（頂上）へと運ぶ。そうしてから口を開くと、そこにはすでに、アポロンとヘルメス・トリスメギストス、ならびにピュティアの二人が立っていた〕

戯曲ディオニュソス　世界の墓　Ⅱ

著　者　　正道

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社